

男子の本懐

城山三郎著 新潮社 1983 (新潮文庫)

昭和恐慌と経済政策

中村隆英著 講談社 1994 (講談社学術文庫)

経済学部准教授 永島 剛

経済不況からいかにすれば脱出できるか。政治は混迷するなか、道筋はなかなか見えてこないこの頃です。示唆をもとめて歴史を紐解いてみることも一案かもしれませんが、いっても、いきなり小難しい専門書はイヤという場合には、小説から読み始めてみるのはいかがでしょうか。

1920年代の後半から30年代(昭和初期)にかけての日本経済も、不況に喘いでいました。そんな中で政権についた浜口雄幸首相と井上準之助大蔵大臣は、金本位制復帰をつうじた日本経済の信頼回復が不況脱出につながると信じ、多くの困難を克服してそのための緊縮財政と行政整理を断行しました。『男子の本懐』は、その二人を主人公にした小説です。経済小説という分野を開拓した作者の代表作で、浜口と井上の不屈な生き方と悲劇的な最期が、静かな感動をよぶ一冊です。

しかし、もちろん感心や感傷だけでは、不況脱出



策への示唆は得られません。大学で人文・社会科学を学ぶみなさんには、この小説で描かれた浜口・井上像を相対化できるような視野をもつための読書も、お奨めしたいと思います。浜口・井上を主人公とするこの小説では、当然ながら、かれらの政策に好意的な筆致で叙述がすすんでいきます。しかし他方で、浜口・井上のとった緊縮政策がデフレを深刻化させ、かえって不況を長引かせたという、かれらの政策にたいして批判的な評価も存在します。そうした好意的な評価、批判的な評価の双方をふまえたうえで、自分なりに考えてみる必要があります。二冊目にあげた『昭和恐慌と経済政策』は、小説ほど読み易くはないかもしれませんが、浜口・井上にくわえ、かれらの論敵であった人々の見解にも言及しながら、当時の複雑な経済・政治情勢とその問題点を解説しています。

名もない顔もない司法 — 日本の裁判は変わるのか

ダニエル・H・フット著 溜箭将之訳

NTT出版 2007

法学部教授 小野 新

欧米の大学法学部と比較すると日本の大学法学部はちょっと変わっている。いったい法学部の入学生のうちどれだけが法律家になるのであろうか。現在では法律家になろうという者は法科大学院に進むのが原則だが、それでも新司法試験の合格率は4人にひとりと狭き門である。しかし、伝統のある日本の大学の多くが法律学校としてスタートしており、最近ではちょっと風向きが変わったとはいえ、法学部を志望する者の数は現在でも多い。

「法学部卒は潰しがきく」と言われ、卒業後の進路も多様で、各界のリーダーにも法学部の卒業生は多いが、それは社会生活を送る上で必要な法の知識があるからというよりも、法学と言う学問が多角的なものの見方、考え方を必要としており、法学を学んだ者はそのような能力を身に着けているからだとも言われる。でも、法学部に入って、ただ日本の法だけを勉強していると、視野がとても狭くなる。日本法の常識が世界の法の常識ではないし、日本法の

内容、存在形式が普遍的な内容、存在形式でもない。世界を見ると、実にさまざまな法規範、法制度、法概念、法的思考方法がある。

外国法の教師の立場から言うと、若い諸君の柔らかな頭脳をさらに柔らかくするためにも、日本だけでなく、世界の法制度も学んでほしい。他国の法や法制度と比較することにより、日本の法を客観的に見ることができ、より正しく理解できるであろう。

紹介する本は、東京大学で法社会学を講じているダニエル・H・フット (Daniel H. Foote) 教授が書かれたもので、日本とアメリカの司法制度を比較し、日本の制度を批判的に考察した内容である。アメリカの制度を持ち上げるきらいがない訳ではないが、とにかく比較することが大切で、井の中の蛙であってはならない。元は英文で書かれているが、訳が実に秀逸で非常に readable になっているから、新入生にも易しく読める。

